

道具を通した伝統産業の保護に関する一考察

—日本竹箴技術保存研究会の現場を通して—

鳥居 史絵

あらまし

織機の一部品である竹箴は、2002年に製造が不可能となった。原因は、多くのものづくりの場において取られている分業制度が起こした、一つの工程が立ち行かなくなると他の工程も立ち行かなくなるといふ弊害によるものであった。筆者は、2003年より竹箴を復興させようとする日本竹箴技術保存研究会への参加を行っている。そこで、本稿では、材料や道具の存続の危機によりそれらを使用して作られる製品や作品の製作に危機が訪れている事例を述べた上で、同様の立場である竹箴の復興活動の意義を述べた。具体的には、筆者自身の体験を通して日本竹箴技術保存研究会の活動を追った上で、組織として必要な要素を明確にした。そして竹箴が辿ってきた滅亡という事態を今後は回避するために、材料や道具の問題を産業全体の問題とすることの意義を考察し、竹箴を復活させるという政策面に関してその意義を検討した。

1. はじめに

1.1 道具の置かれている現状

例えば着物が一反在るとする。この着物を作るためには、糸をつくる人、染める人、織る人、縫う人など、多くの工程を経ることが求められる。そしてそれら一つ一つの工程は、さらに一工程を全うするための道具や原料を作り育てる何人もの人によって支えられている。着物作りに限らず、現代は長年続いてきた伝統技術が一つ一つ減ぶことによって、製品や作品が作れな

くなる状況を迎えようとしている。そして時代の波に飲まれ既に減ってしまった技術も存在する。「伝統産業の保護」と言っても、注目が集まるのは完成した製品や作品である。その製品や作品を作り上げるための中間の工程やその職人たちが使う道具や材料を保護することの大切さに気付いたのは、作るための術を失ってからであった。

では、なぜ製品や作品を作ることが出来なくなるまで、中間工程や道具製作へ注目がされなかったのだろうか。その理由の一つに、分業体制の弊害がある。伝統工芸品の例で見ると、一つの作品を完成させるためには、多大な労力と熟練の技術が必要とされる。この労力に関しては、材料ごとに各産地から集め、加工することが求められる。技術に関しても、集められた原材料を加工するための熟練した技が求められる。これらを全て一人の人間が行うことは不可能に近い。そこで各仕事で作業を分担する分業制度がとられるようになった。分業制度の導入により、「その道何十年」と呼ばれるような各工程への専念が可能になった。同時に各工程の技術の向上から、完成作品の質が向上した。自身の工程へ専念しさえすれば良いことから、大量生産にも応えられるようになった。このような分業化による利点がある一方で、分業化による弊害も起こった。まず、各工程の職人は自分の工程にさえ専念していれば良いことから、中間工程の職人はどのような完成品が作られたかを知ることが難しくなった。同時に、ある中間工程の職人は、自分の行った後の工程でどのような加工が行われるかを知らなければ、必要な作業であったとしても不要な作業と見なして切り捨ててしまいかねない。その職人は、前の

工程の職人から受け取ったものへ自分の仕事だけを加えて、次の工程の職人へ渡せば良いだけなのである。

このような仕組みと性質を持つ分業体制であるため、ある日一つの工程が立ち行かなくなると、芋づる式にその工程以後の仕事は出来なくなってしまう。それ以前の工程も、買い手が居なくなってしまうのであれば廃業せざるをえなくなる。ある工程が成り立たなくなる理由として、主に材料の不足か職人の不足が挙げられる。材料の不足は、人々の生活環境の変化からその材料自体を作らなくなってしまう事に起因する。職人の不足は、職人を志す者は居るにもかかわらず、作った製品や作品の買い手の減少により制作者の生活が成り立たないため、技術を伝えられない状態に起因する。手焼き煎餅焼き型作りの場を見た今崎五洋は「使い手以上に長生きしている焼き型を使いこなす後継者が育つかどうか心配である。」(道具学叢書委員会, 2007, 159ページ)と述べている。このような中間工程の欠如により作品が作れなくなる事態が起こり出しているのだ。

1.2 本稿の目的と方法

前節で述べたように、道具は滅ぶ運命を有する。このように滅んでしまった道具の一つに竹箴がある。竹箴とは、竹製の箴¹と呼ばれる機織り機の部品の一つである。その生産が日本においてほぼ途絶えてしまったのは2002年のことであった。しかし、手織りを行う織り手からの竹箴を欲する声に動かされ、竹箴を復活させようとする「日本竹箴技術保存研究会」(略称:竹箴研究会)が2003年7月に設立された。

筆者は、この竹箴研究会に2003年11月29日に行われた研修から参加している。入会当初、筆者は箴の存在はもちろんのこと、染織について何も知識を持たないも同然であった。このように予備知識も経験も無い者が体験してきたことを通して、竹箴研究会という一伝統産業の復活を目指す場で求められたことを記し、その意義について述べたい。

本稿は、筆者が竹箴研究会に所属し、2008年3月までの竹箴の作り手としての活動を通じて、筆者が得た伝統産業の復活を行う意義とそのため必要な要素をまとめたものである。また2008年4月からは織りを習うことで竹箴の使い手としての経験を積んでいる。それらの活動を通じて、修士論文に成果をまとめる予定であることを追記する。

本稿では、第一章の第一節で道具の置かれている現状を述べた。本章では本稿の目的と方法を述べ、続く第二章では伝統技術や伝統産業の場で起こっている材料や道具不足による弊害と、公によって取られているその措置について、各節に区切って述べた。第三章の第一節では竹箴自体に関する説明を設け、第二節ではかつての日本最大の竹箴製造企業であった日本竹箴工業について述べ、第三節では竹箴の復興を目指す竹箴研究会について述べる。第四章では筆者自身の体験から、竹箴研究会の取り組みを通してその性格を見つめる。第五章の第一節では竹箴が辿ってきた滅亡という事態を今後は回避するために、材料や道具の問題を産業全体の問題とすることの意義を考察し、第二節では竹箴を復活させるという政策面に関してその意義を考察する。そして第6章では今後の展望を述べる。

2. 伝統技術・伝統産業について

2.1 各産業で起こっている道具不足

竹箴が既に一度滅んでしまったも同様な様に、他にも中間工程や道具作りが危機に瀕していることにより製品や作品自体の作成も危機に瀕している分野がある。ここではその中から二つの例を紹介する。

一つ目に、藍作りにおいて必要とされるムシロを挙げたい。筆者の在籍するソーシャル・イノベーション研究コースで開講された「ソーシャル・イノベーション型再チャレンジ支援教育プログラム」(社会人学び直し講座)²で、2009年2月2日に藍師の新居修氏³を講師としたプログラムが開かれた。(以下、本段落はその

¹ オサ。3.1にて説明する

² <http://sosei-si.doshisha.ac.jp/manabi/> (参照日2008年3月14日)

³ 6代目藍師。2008年2月2日現在、4人の国選定文化財阿波藍製造技術保持者のうちの1人

場で伺った講話に基づく) 日本一の藍の産地である徳島県は、県全体で最盛期には200ha在った藍畑であったが、一時は4haまで落ち込んだものの、現在では25haにまで持ち直しており、現在でも藍作りの技術が传承されている。しかし、すくも⁴作りの工程において藍葉を発酵させる際に必要なムシロが得られにくくなっているため、すくも作りに危機が迫っているという。藍を発酵させる際に「お布団の様に」ムシロを被せる。このムシロを作るためには、長いままの茎の藁が必要とされる。しかし、米の収穫時にコンバーターが使われるようになったことで刈り取った稲の茎は裁断され、長い藁は得られなくなってしまった。発酵は、藁に生息するバチルス菌により促進させられるため、ムシロは必要不可欠である。「すくも作りを継承する上で、今後の問題である。」と新居氏は語った。

二つ目に、漆制作における筆の存在を挙げたい。漆職人である室瀬和美は以下のように述べている。

蒔絵用具には、一般的には全く使われることのない道具が多く含まれている。蒔絵筆は、書道や絵画の筆とは作りも材料も異なっている。それは漆という塗料が粘性が強く、しかも細い線を引くためにより粘性を強くして使用するからである。先術したように蒔絵筆は、材料である鼠の毛が入手できなくなったため、難しい局面に入っている。私達蒔絵をする技術者は現在持っている筆がなくなるともう手に入れる方法はなくなってしまふ。数年前までは鼠の背中の毛で作られた根朱筆が一本三万円程していた高価なものだったが、今となってはお金をいくら出してでも手に入らなくなってしまった。(室瀬, 2002, 169ページ)

この事態に対して室瀬は「これからは材料や用具がますます手に入りにくなる時代になるが、視点を変えた制作が必要になってくるだろ

う。」(室瀬, 2002, 166ページ)と述べている。手に入るものを利用するしかないが、それらを利用して新しい発想や技法を生み出すことが求められるということであろう。経営思想家であるP.F.ドラッカーはその著書の中で以下の様に言及している。「専門技術によってニッチ確保に成功した企業は、たえずその技術の向上に努めなければならないということである。常に一歩先んじなければならない。まさに自らの手によって自らを陳腐化していかなければならない。」(ドラッカー, 2007, 289ページ) 伝統のものが失われることを見過ごすまましていて良いとは言わないが、それでも古くからのものに固執するあまり時代の要求に目が向かなくなってしまったら本末転倒である、と筆者は解釈している。

2.2 公による保護措置

1949年法隆寺金堂の火災によって壁画が消失した事件を切掛けに、翌年「文化財保護法」⁵が制定された。第一章総則第一条の「この法律の目的」によると、「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」と定義付けられている。現時点における最終改正である平成十九年三月三〇日法律第七号に則ると、この法律は文化財を 1.有形文化財 2.無形文化財 3.民俗文化財 4.記念物 5.文化的景観 6.伝統的建造物群 に分類し、定義付けている。そして1975年に文化財保護法が改定されると、第十章文化財の保存技術の保護第四百七十七条では、「文部科学大臣は、文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術又は技能で保存の措置を講ずる必要があるものを選定保存技術として選定することができる。」と定めている。この「選定保存技術」⁶の制定により、公によって文化財

⁴ 藍葉を発酵させて作る藍の染料

⁵ 文化財保護法

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S25/S25HO214.html#10000000000100>

(参照日2008年3月14日)

⁶ 文部省告示第百六十六号 選定保存技術の選定並びに保持者及び保存団体の認定の基準による

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19751222001/k19751222001.html

(参照日2008年3月14日)

の保存技術の保護の必要性が唱えられるようになったと言える。しかし、2008年3月14日現在、この選定保存技術に選定されている技術の保持者または保存団体は、「芸能の部」は8、「工芸技術の部」は12である⁷。あまりにも少ないと筆者は感じている。

技術を保存するためにはどうしても活動資金が必要となる。そこで、公募式の助成金という形で援助を期待できるものに、「芸術文化振興基金」がある。基金の目的を以下に記す。

「芸術文化振興基金」は、すべての国民が芸術文化に親しみ、自らの手で新しい文化を創造するための環境の醸成とその基盤の強化を図る観点から、芸術家及び芸術に関する団体が行う芸術の創造又は普及を図るための活動、その他の文化の振興又は普及を図るための活動に対する援助を継続的・安定的に行うことを目的としています。

(芸術文化振興基金 基金の目的⁸より)

この助成の対象として、「文化財である工芸技術又は文化財の保存技術の復元、伝承その他文化財を保存する活動」⁹が含まれる。年一回の公募によって助成対象が決められるという性格がある。また政府と民間からの援助によって基金は成り立っているため、助成金額と助成対象ともに年々増加している¹⁰。

3. 研究の対象

3.1 竹箄

3.1.1 竹箄の性格

竹箄とは、竹製の箄と呼ばれる機織り機の部品の一つである(図1)。箄は張られた経糸(タ

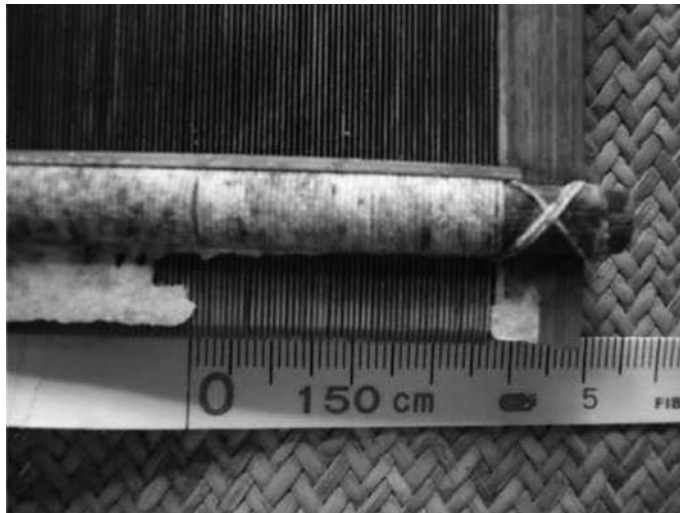


図1

⁷ 文化庁

<http://www.bunka.go.jp/1hogou%5Cshoukai/main.asp%7B0fl=show&id=1000011331&clc=1000000153&cmc=1000000179&cli=1000000249&cmi=1000000251%7B9.html> (参照日2008年3月14日)

⁸ 芸術文化振興基金 基金目的

<http://www.ntj.jac.go.jp/kikin/gaiyou/index.html>
(参照日2008年3月14日)

⁹ 芸術文化振興基金 助成対象

<http://www.ntj.jac.go.jp/kikin/gaiyou/k-jigyuu/k-jigyuu.html>
(参照日2008年3月14日)

¹⁰ 芸術文化振興基金 助成実績

<http://www.ntj.jac.go.jp/kikin/gaiyou/k-jigyuu/k-jigyuu.html>
(参照日2008年3月14日)

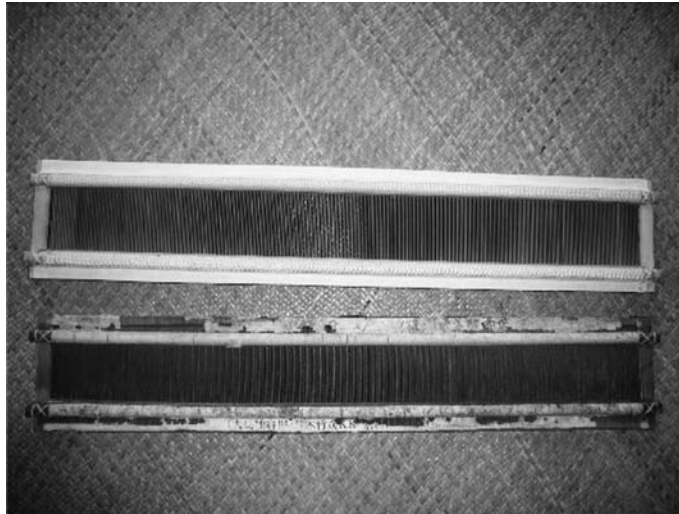


図2

タイト)に緯糸(ヌキイト、ヨコイト)を通し、目を詰めるため打ち込む作業を行う際に使用する道具のことであり、さらに織物の幅自体も整える一種の櫛のような機能を果たしている。竹筧はその使用目的、すなわち糸の種類や密度に合わせて、櫛の歯の部分に当たる筧羽の厚さや枚数が異なる。絹織物に使用されるような筧羽の目の細かいものでは1cmの間に17枚前後の筧羽が入る。筧羽は長さ7.5～10cmほどで厚みは0.5～0.05mmであるものが基本である。反りも曲がりも凹凸もなくなめらかな600～900枚の竹片が全て同じ大きさに40cmの枠の中に一定間隔で組み込まれている(図2)。元「日本竹筧工業」¹¹代表取締役であった豊田享によると「一番薄いものでは筧羽を透かして新聞が読めるほどであった」という。その筧羽を作る工程において、竹を削るために使われる道具は正直台(ショウジキダイ)と呼ばれる。日本刀のような刃が木製の台に楔で固定してある構造をしたものである。台の前に腰を下ろし、奥から手前に向かって竹を刃に滑らせて「引く」作業を行うことで筧羽を削り出す。所定の枚数の筧羽を人間の手によって均一に削り上げる技術が要求される。また、それらの筧羽を枠に等間隔で平

行に収める作業を筧組みという。筧組み作業も高度な加工技術が必要とされる。布を織る時に、1.筧の質 2.使用する糸の性質 3.何を織る目的であるかが揃わないと、織り上げられる布に筧目と呼ばれる傷が生じたり、経糸が切れてしまいかねない。筧の製作には精密性と適合性が求められる。

現代の日本において圧倒的に多く使われている筧は、竹筧ではなく、金属製の金筧である。ヨーロッパで使用されてきた金筧は、日本が明治維新を迎え、機械性の織機が導入されたと同時に輸入された。金筧伝来以前から使用されていた竹筧に比べて、金筧は格段に耐久性があったため、「大正一〇年頃より金筧歯が出廻り、非常な勢で全国に販路を拡げた」(穂積町, 1979, 525ページ)ため、次第に日本国内に普及していった。それでも伝統工芸品に指定されるような反物を織り上げる人や、作家的に手織を行う人の中には根強く竹筧を求める人もいる。以下に、竹筧研究会で織り手を対象にして行ったアンケートによって得られた竹筧の特徴を挙げてみたい¹²。

- ・竹の持つしなる性質により経糸への負担が少量で済むため、経糸が切れにくい

¹¹ 日本一の竹筧(羽)生産地であった岐阜県瑞穂市祖父江に存在した。日本で最後まで竹筧羽製造を行っていたが、2002年に廃業した。

¹² 日本竹筧技術保存研究会
<http://takeosa.blog.shinobi.jp/Category/10/>
 (参照日2008年3月14日)

・麻のように濡らした糸で織る場合、竹箴ならば錆が浮き織物を汚してしまうことはない
 ・竹という自然素材であるため手に馴染み易い
 また、2007年12月8日の竹箴研究会での研修の折りに、会員であるHさんから、竹箴だと静電気が起きないから、それが原因で糸が抜ける事がない、と伺った。また下村会長から、金箴は一枚500g弱であるのに対して竹箴は100g強であるため、経糸を宙に浮かせた状態で箴通し¹³を行う所では、竹箴の方が箴自体の重さで経糸が下がってしまうことが起こりにくい、と伺った。

工学博士である加藤忠一による著書『金箴および箴屋』が2007年11月に自費出版という形で出された。田口が「箴に関する研究は非常に少ない。(中略)箴業についての歴史的研究は、京都西陣における宝暦4年の箴仲間成業統制(手札発行)から箴業と非差別の関係を強調したものに限られる。」(田口, 2003年, 37ページ)と述べている通り、加藤の著書は国内初の箴に関する専門書であった。このことから明らかな様に、竹箴についての研究資料はあまりにも少ない。

3.1.2 日本竹箴工業

1.2で竹箴の生産がほぼ停止したのは2002年のことであると述べた。この原因は箴を組み立てる工程を行う最後の職人であった、森助一¹⁴が2002年に体調不良により仕事をしなくなったからである。森氏が仕事を辞めたことによって、箴羽を製作していた日本竹箴工業も解散した、と日本竹箴工業の代表取締役であった豊田亨は話す。さらに、箴作りは昭和50年代以降は、祖父江で作られた箴羽を各地の組み立て職人が製品にすることで販売がなされていたという。ここで注目すべきは、「各地の織物産地で最後の一軒として活躍する箴職人の聞き書き記録で共通するのは、『先代の頃には竹の伐採から行っていたが、今は箴羽を岐阜県の業者から取り寄せている』ということである。」(田口, 2003年, ページ) 各地で作られた竹箴の大元は岐阜県

の一業者が担っていたのだ。下村輝は以下の様に述べている。

そこそこの数量を手仕事で大量生産するにはこの分業制度は有効だったが、均一な物から自分だけの個性的な物への消費者の方の要求は時代と共にこの制度での対応をむつかしくしています。分業の世界の仕事では加工していくらの生活ですから、その加工だけで生活できない数量になると廃業、突然一部が止まると全体が止まります。竹箴がまさにそれです。(中略)箴羽の竹は九州から、これも風前の灯火とのこと、竹林を守り切り出し、原材料に加工されていた人がおられたこと、人と人とのつながりがあり、そこにお互いの経済が成り立って初めて一つのものが出来上がっていたことに、あまりにもなれすぎ無関心だったと思っています。(下村, 2002, #202)

最後まで日本の竹箴を支え続けた日本竹箴工業は竹箴の歴史を語るに当たって必須の存在と言えよう。日本竹箴工業が存在したのは岐阜県瑞穂市(旧穂積町)の祖父江の地であった。この地で竹箴作りが始められたのは、嘉永5年から6年(1855年、56年)頃ではないかとされている。祖父江は3つの河川が集まる地域であるため、常に水害に悩まされていた。不作続きで貧困に喘ぐ百姓の救済措置として、近隣に織物産地が点在することから、土地の有力者であった栗山拓治郎が農家の副業にと竹箴作りを導入したことが竹箴生産の切掛けであった。「昭和22年(1947年)に設立された日本竹箴工業は(設立当初は美濃製歯株式会社)、明治16年(1883年)の祖父江竹箴組合を前身とし、平成13年(2001年)に解散するまで、竹箴羽および竹箴の注文受付・販売と原材料の購入を行ってきた。戦後は朝鮮動乱のころに最盛期を迎えるが、その後の売上は下降していき、廃業時の平成13年度には、最盛期¹⁵の40分の1になったという。」(田口, 2003, 39ページ) (括弧 () 内は筆者による補足) とある。

¹³ 経糸を1本ないし2本づつ、箴羽の一目一目に通して行く作業

¹⁴ 岐阜県瑞穂市祖父江の竹箴職人。箴の製作を一環して行っていた。2002年10月ご逝去

¹⁵ 昭和25年頃。祖父江の8割の家が竹箴作りに関わっていた。日本竹箴工業では、最盛期には月産箴2万枚を製造しており、JAPAN BAMBOO-REEDS&CO.としてインド・パキスタン・フィリピン・中国(台湾)・ベトナム・朝鮮と国外にも輸出を行っていた旨が『穂積町市』に書かれている。

3.2 日本竹箴技術保存研究会

3.2.1 発会の経緯

メディアの発達により欧米のファッションを目にする機会が増えると日本人の着物離れが進んだ。これらの影響を受け、竹箴の主力出荷先であった全国各地の手織り業は生産の規模を縮小せざるを得なかった。手織りに携わる人の数の減少により、その道具の一つである竹箴の需要も少なくなっていった。織り手が新たな竹箴を求めた時、周りに在った織り作業に携わらなくなった者の竹箴を譲り受けることで間に合わせた時期があった。そして、それでは竹箴の供給が間に合わなくなり、手織りを継続していた織り手が新規の箴を欲した時には、既に日本の竹箴は絶滅に瀕していた。将来を悲観した竹箴職人自身が後継者を育成しなかったのだ。そして、2002年にその生産は止まった。分業制の弱点は、一つの工程が失われるとそれ以降の工程も生産が止まってしまう点が挙げられる。

その様にして失われた竹箴であったが、求める声が絶えることは無かった。それらの竹箴を欲する声を受けて動き出したのは京都の撚糸屋の主人である下村輝であった。下村氏は手織りをする人々を直接の顧客としていることから、いち早く竹箴が手に入らない状態を聞きつけたのであった。声の主である織り手たちは大半が

女性である。そのため自分で高度な竹細工を行うことは難しかった。専門に竹箴を作る人を探すことが求められた。下村氏は機料品店を当たり、竹箴は祖父江で作られていたことを突き止めた。染織と生活社で出版された『月刊染織 a』のインフォメーション欄に下村氏が「竹箴の現状」と題した記事を書いたところ、その記事が文化庁文化財部伝統文化課のK女史の目に留まった。K女史は下村氏へ、竹箴作りを祖父江の職人に習ってみないか、と提案をした。また芸術文化振興基金という形で補助金を得られる可能性についても紹介した。かくして、2003年7月にまた同年11月29日より施行された会則に則り、下村輝は会長に選任された。「日本竹箴技術保存研究会」は発足した。その後、毎年竹箴研究会は芸術文化振興基金の対象として選ばれている。

3.2.2 事業内容

竹箴の復興と持続的に市場へ出すことを竹箴研究会の目標にして、まずは竹箴復興のための研修を始めた。場所は岐阜県瑞穂市祖父江の「日本竹箴工業」時代からの竹箴職人の自宅にある作業部屋であり、月に2回のペースで行われている(図3)。その指導を行なっているのが豊田亨と竹箴職人である豊田義男、豊田陸雄である。他の元職人の一人が使用していた正直台を



図3

はじめとする道具他20点を使用して、竹を割り、箴の形に組む技術を毎回の研修を通して身に付けていく。豊田義男、豊田陸雄の両氏は箴羽を作る行程までの職人であったため、残っていた資料をもとにして箴を組む技術を再現した。2003年11月29日に定められた竹箴研究会会則¹⁶には、その目的と事業を以下の様に記している。

(目的)

第三条 本会は、竹箴および竹箴羽の製造技術の保存および継承と、そのための記録調査研究に努めることを目的とする。

(事業)

第四条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1) 竹箴および竹箴羽の製造技術の伝承者養成と技術の錬磨
- 2) 竹箴および竹箴羽の製造技術の伝承者養成にとって不可欠な諸道具、材料の問題や継承した技術が生きる環境作りに関連した複合的問題に対応するための調査研究
- 3) その他、目的を達成するために必要な関連事業

竹箴研究会の会員は、正会員（竹箴および竹箴羽の製造技術の技術研修に参加し、技術伝承と伝承者養成に携わる者、または技術の記録や調査研究活動に携わる者）、特別会員（竹箴および竹箴羽の製造事業に直接携わってきた者で、技術伝承者の養成において技術指導をお願いする者の5名。内1名は名誉会長。内1名は逝去している。）準会員（正会員の事業活動への協力者）、賛助会員（事業目的に賛同する者）で構成され、正会員の中から会長、理事を5名出している。その内一名は副会長、さらに内一名は事務局で、監事も2名定めている。2008年5月5日現在、100人近くの方が竹箴研究会に見学にいらした。その中で毎回の研究会の参加者は10～15人ほどである。その参加者のうちの多くがほぼ毎回参加する人であることから、参加者はほぼ固定されていると言っても過言ではない。

4. 筆者の体験を通した竹箴研究会の取り組み

4.1 第一期 参加の切掛けと初期の参加

筆者が竹箴研究会へ初めて参加を行ったのは2003年11月のことであった。社会学部の大学一年生であった筆者は、自身の研究対象を決めかねていた。偶然耳にしたある教授の講話に興味を持ったことから、その教授の研究室の扉を叩いた。そして、教授に「きみは何に興味を持っているのだね？」と尋ねられた。筆者は答えることが出来なかった。漠然と福祉関係に興味を持っている旨、図画工作の類を趣味として好んでいる旨のみ伝えた。それならば、と紹介されたのが竹箴研究会であった。その教授は、ものづくりの研究を活かして竹箴研究会で理事を行っていた。竹箴と呼ばれる機織り機の一部品の生産が途絶えてしまい、その復興を目指す団体であると伺った。筆者は織物の知識は無いも同然であったため、教授からの「オサって知っていますか？」という問いかけには、当然「いいえ」と答えた。筆者と布の関わりは、生産され製品として供給された衣服を身につけるという消費者であり使用者の立場でその恩恵を賜っていたのみであった。生産方法の一つである手で布を織るという行いに関しては、昔話を通してそのような行為が存在することを知る程度であった。このような状態で、竹箴研究会への第一回目の参加を行った。

研修地である祖父江へは最寄りの穂積駅まで電車で2時間半の道のりであった。研修は13時から16時半頃まで行われた。まずは研修場である竹箴職人の家の居間で、下村会長による全体説明が行われた。その折に、「今日は大学生の見学者が来てくれました。」と、にこやかな笑顔と共に、受け入れの雰囲気があったことに筆者は不安の感情が緩んだことを覚えている。「若い人にも興味を持ってもらい、研究会に来てもらいたい。」という下村会長の言葉は、竹箴が途絶えた原因に起因するものだというのを後々の説明から理解した。

筆者は初めて竹箴を目にした時の衝撃は今で

¹⁶ 日本竹箴技術保存研究会 会則
<http://takeosa.blog.shinobi.jp/Category/6/>
 (参照日2008年11月14日)

も鮮明に覚えている。日本竹箴工業時代に作られた竹箴を見せられた時、竹製の枠の中に何百枚もの箴羽が収まっている構造に気付くことが出来なかった。全て同じサイズの箴羽が整然と並んでいるため、調度品にも成るのでは、という印象を受けた。箴羽を削り出す作業を実際に行ってみたが、竹は途中で千切れ、凹凸は生じ、一枚も同じ厚さに削り出すことは出来なかった。当時の筆者の日記を読み返すと、「頭では分かっているはずなのに」という嘆きが綴られていた。「ほいじゃーワシがやってみるかのう」という掛け声と共に、先生役である竹箴職人の豊田陸雄はお手本を披露してくださった。ご高齢のため普段は足取りもおぼつかないにもかかわらず、その作業は目にも止まらぬ早さと正確さがあった。当初他の会員の方に「陸雄さん(の作業は)何してるか見えないよ」と言われていたことに筆者は半信半疑であったが、納得せざるを得なかった。正直台は長年使い込まれた木製品独特の艶を放っていたことから、一層の威厳を感じた。

自分もこのような技術を身に付けたい、そして箴を欲している人に貢献したい、頑張ろう、と意気込みを抱くには十分な魅力を筆者は感じていた。そして出来ることならば職にして生計が成り立てば良いとの夢を持った。

4.2 第二期 技術修得への挫折の時機

「自身も竹箴を作れるようになりたい」と願って参加を始めた竹箴研究会であったが、困難はすぐに訪れた。まず、参加が出来ないのである。当時は月に2回金曜日に研修は行われていたが、金曜日は大学の授業が入っていた。1年ほど過ぎると、今度は土曜日に研修は行われるようになった。しかし、土曜日は所属していたアルバイトで特に出勤が求められた。何とか都合を付けて竹箴研究会への参加が適っても、前回の参加から時間が経ってしまっているため、手の感覚はまた一から取り戻すしかなかった。加えて、8畳ほどの場所で一度に作業を行える人数は道具数から4人までしか適わなかったため、毎回の研修における1人の作業の持ち時間は満足のいくものではなかった。さらに、正会員であれば片道分の交通費の補助が支給される

とはいえ、往復5000円の交通費も抵抗感を感じる一因であった。そして竹箴作りを将来職とすることは現時点では間違い無く無理であることを知った。竹箴作りのために時間が拘束される割に収入が得られないのだ。最盛期の頃でさえ、竹箴作りを専業に行っていた家は限られていた。そもそもの需要が少ない現代では、まず間違い無く竹箴作りを収入源と考える程の採算は取れないと研修を通して知った。次第に筆者は竹箴作りへの情熱が薄れて行った。

竹箴作りへの情熱は薄れていったものの、会への参加を願う心までもが失われることはなかった。その理由は、一つは竹箴作りという行為へ敬意を抱いていたためである。使用している道具は簡素なもののみであるにもかかわらず、人間の手の感覚一つで自在にサイズを調節し同じものを何百と作り出す技術は、とても一朝一夕で身に付くものではない。この難しさは、自身も体験したことにより印象深く感じたのであった。二つめの理由として、竹箴研究会の会員から話しを聞くことを参加の楽しみとしていたためである。竹箴研究会会員の募集は、主に染織と生活社から出されていた『月刊染織a』を通して行われた。したがって、おのずと染めや織りをする人ばかりで会員は構成された。会員の間で取り交わされる染織に関する話題を耳にするうちに、次第に筆者も染織の世界へ興味を持つ様になった。

さらに1年経った頃、会員の協力によって道具は量産され、自宅研修が推奨されるようになった。以前にも増して参加が遠のいていた筆者に対して、何かと気にかけてくださる会員の1人が「アナタがお休みしていた間に、私たちはここまで上達したのよ。」と冗談まじりに励ましてくださった。しかし筆者は、そのことばに奮起する気さえ起こせなかった自分自身に対してショックを受けた。それでも自宅で行えば上達するかもしれない、という一縷の望みにかけて、道具と材料をお借りした。しかし、自宅での練習も上手くいくことはなかった。材料である竹は使用前には数日間水に浸けて柔らかくしておく必要があった。竹は40×3センチほどの竹片に割られたものとはいえ、その束は重く、夏場は水もすぐに腐敗してしまうため、頻繁に水を変える必要がある。そして練習を行うと、刃の角度の調節は上手くいかず、難儀の後いざ

始めると周りに竹クズが散った。6畳一間のアパートの一室では、これらを行うスペースを確保することにも骨が折れた。案の定、宝の持ち腐れとなってしまった。その年の年度末に道具は返却した。毎回研修の連絡をくださる下村会長に申し訳ないと思いつつ、大学4年生時には年間2回しか竹箴研究会の研修へ参加しなかった。

この時期に筆者が感じていたことは、もどかしさであった。竹箴研究会のために何か役に立ちたいと思っているにもかかわらず、何も出来ない自身を不甲斐なく感じていた。何も能力を持たないため、竹箴作りという形でしか竹箴研究会に関わる道を見出せないでいた。その唯一の道である竹箴作りを身につけることは絶望的としか言えなかった。竹箴研究会会員は50代以上で他につきっきりの仕事を持たなくても暮らして行ける人が大半を占めている。そのこともあって、下村会長からの「若い人にも興味を持ってもらい、研究会に来てもらいたい。」という言葉は相変わらず事あるごとに伺っていた。「鳥居さんのような若い方は、まず来てくれることに意味があります。そしてどんどんお友達を引っ張って来てください。」という言葉に、無条件で迎えていただける嬉しさ、若さという筆者の能力ではないことでしか役に立てていないもどかしさ、期待されることさえ行えない申し訳なさを筆者は感じていた。自身は何も能力を持たない「おもちゃ」の様であると感じていた。

4.3 第三期 ウェブサイト運営責任者としての参加

2007年、筆者は大学院に入学した。所属するソーシャル・イノベーション研究コースの取り組みの一環として、学生はフィールドワークとして各自現場に入ることが求められた。筆者はフィールドの選定にひどく苦心した。そしてふと気付いたのが竹箴研究会であった。「今度こそ上手く関わる手が得られるかもしれない、駄目ならその時考えよう」と竹箴研究会への再度の参加を決めた。その一方で、相変わらず毎回の研修連絡をいただいていたにも関わらず、真っ先に竹箴研究会をフィールドとして候補に

挙げる事が出来なかった自身を悔やんだ。

大学院入学後最初の研修への参加は6月に入っていたことであった。しばらく参加していなかったため、参加者の半分も顔と名前が分からなかった。また、筆者にとって馴染みの深かった方で最近では参加が見られない、という方も居て寂しさを感じた。

「鳥居さん、竹箴研究会のホームページを作ってください。」これは、毎回研修の最初に行われる下村会長の全体説明の時間の中で筆者に向けられた言葉である。竹箴も一応形にすることが出来、現在は各地の織り手に試し織りをしていただいて、問題無く竹箴が使えるかどうか試している。「竹箴の完成は作り手が判断すべきでない。使い手にしか判断できない。」これは、豊田亨が頻繁に強調される言葉である。そういった使い手からの返答結果を随時竹箴を欲する方々に発信していくために、また竹箴の存在自体を知らせていくために、さらには使い手の竹箴への意見を得るために、最も利用されやすい情報発信の手段としてウェブサイトの開設をしなくては行けない、と下村会長は言われた。竹箴の情報を求める人の半分以上は、おそらくパソコンに疎い高齢者であろう。それでも、世の中に広くアピールしていくためにはウェブサイトという手段は充分有効である、という下村会長の見解であった。「われわれはパソコンを触ることすら億劫なんです¹⁷。学生さんの得意分野を生かしてください。」と言われたことだけで、筆者は「今日、竹箴研究会へ来て良かった!」と思った。筆者は2004年頃にも竹箴研究会の活動報告を載せたウェブサイトを作ったことがある。しかしこの時はどのような情報を載せれば良いのか分からず、結局は内容が薄いまま更新もほとんど無いものとなってしまう。このウェブサイトは2007年に削除している。筆者はウェブサイトの運営に関して特別な知識が有ったわけではない。しかしキーボードくらいは不自由なく打つことが出来るし、2004年に作成したウェブサイトは今度こそきちんと作りたいとの思いもあり、ウェブサイト運営責任者として竹箴研究会へ関わることを決めた。同時に技術の修得は諦めた。ウェブサイトの内容は、閲覧者が竹箴研究会のみでなく竹箴自体に関しても知ることが出来る内容にする点を下村会長

¹⁷ 実際その日の参加者に伺ったところ、半分以上の方がパソコンを利用したことがなかった

から求められた。またデザインとして、毎回の研修の日にちが一目瞭然である点が求められた。他は筆者の一存で決めて良いとのことであった。個人情報掲載に関する点は、その都度本人と相談することにした。

数々のアドバイスをいただき結局4度に渡るウェブサイトの形態の変化を経て、2008年3月14日現在公開されている形態¹⁸での公開を始めることが出来たのは2007年10月に入ってからであった。更新の手軽さからブログ形式のものにした。日々のアクセス数は指で数えられるほどであるが、それでも毎日誰かに見てもらえていることは確かである。このウェブサイトを見て下村会長のもとへ竹箴作りに関する問い合わせの電話があったという旨を2008年2月23日の研修の折に伺った。コメント欄には、2004年度を中心に竹箴研究会に積極的に参加しておられたがお仕事の関係上参加が適わなくなった方から応援メッセージをいただくことができた。また、このウェブサイトには立ち上げ時よりアクセス解析の機能を付けた。このことにより、どのような単語を検索した結果アクセスしているかが分かる。2008年5月5日現在、検索エンジンを経由してのアクセスは141回あり、その中で最も多い45回は「竹箴」、次いで13回で「日本竹箴技術保存研究会」であった。

筆者はウェブサイト運営責任者として竹箴研究会に関わるようになったことで、ようやく自身の居場所を見つけられた思いであった。その理由は、2008年3月12日に下村会長と電話で交わした話題に象徴される。まず下村会長が筆者に、福岡の方から竹箴研究会のウェブサイトを見たとの連絡があった旨を伝えてくださった。そして下村会長からの「横の繋がりが生まれそうですね。」という言葉は、筆者が何よりも欲していた竹箴研究会に貢献するというを、一つ明確に示していただいたことになる。さらには、竹箴研究会ウェブサイトのアドレスの判子を下村会長は作られたとのことで、「(家業である)糸の発送をする時に全て袋に押しますので、また(竹箴研究会ウェブサイトを見る人が増えるでしょう)」(括弧内筆者補足)と話してくださった。竹箴研究会ウェブサイトは世の中

の人々に見ていただけるだけの内容がとりあえず組み込まれている、と下村会長に判断していただいていると筆者は捉えた。「ワシヤ糸車を作るけどよ、鳥居さんはホームページを作れば良いで。みんなそれぞれ得意分野が有るだよ。みんなで竹箴研究会を作ってつとるで。」2008年1月26日の研修の場で、竹箴研究会会員の一人からぼろっと言われた言葉に筆者は涙をこらえるのに必死であった。

ウェブサイト運営責任者として関わるようになってから、会の問題点に気付くようになった。まず、研修場をめぐるものがある。現在、研修場として指導職人の個人宅の作業場を使わせていただいている。玄関を入り、土間の右手に6畳ほどの作業場が、左手には居間が並ぶ昔ながらの作りを残した家屋である。しかし作業場といっても2~3人で鋭利で大型の刃物を使う作業をしていたのであるから、研修の場として10人以上が詰めかけるには当然のことながら手狭だ。「せっかく岐阜まで来てるのに実質作業できる時間って3時間ちょっとでしょ?かといって、その時間フルで道具が触れるわけでもないし…。」「おうちで作業しようとしても、一つ分からないと先に進めないじゃない。研修は2週間に1回だから、その間もどかしい気持ちでねえ。」このつぶやきは、それぞれ2007年12月8日と2008年1月26日の研修でのおしゃべりの際に聞かれたものである。研修場の困難、自宅研修の困難は4.2で述べた筆者の体験と同様の困難を他の竹箴研究会会員からも聞かれた。そのような理由から、せめて研修場ぐらいは有効に使える環境を整えてほしいという要望が出た。

研修場をめぐる問題については、下村会長は以下のような見解を持っていることが分かっている。「自分もいつまでも職人の家に甘えてはいけなはいとは思っている。現在の作業場でさえ、職人の家族に家を新築したいと言われたら無くなることは目に見えている。当然、どこか新しい作業場が見つければそれに越したことはない。しかし、新しい作業場を得ると新たな問題も発生する。指導職人が高齢で体も不自由なことから、移動が大変である点、新しい作業場を誰が管理するかの問題点、光熱費の負担、

¹⁸ 日本竹箴技術保存研究会
<http://takeosa.blog.shinobi.jp/>
(参照日2008年3月14日)

新たな道具の作成、廃材の処理、といったことが現時点で既に心配される。知多木綿の現場の様に、市に木綿蔵を借りることが出来ているのは、木綿作りは地域の人に参加しやすく、地域教育にも役立ち、気軽に利用してもらえそうなテーマであるから。箆はあくまで織機の部品であって馴染みが浅く、また高度な技術を必要とし、使う道具も単純ではあるが危険性は高いため、地域に施設の提供を求めることは難しい。それでも探してみる必要が有ることは確かである。」と述べた。

下村会長に場所をめぐる問題を問いかけたのは2007年7月28日に開かれた総会の場の後のことであった。竹箆研究会ウェブサイトの記事の一つとして、竹箆研究会への問題や思い入れを得ようと、その場で簡単な記述を求めた。しかし、記述による回答の中には、問題点を挙げたものは無かった。研修場をめぐる問題の指摘は、総会が終わった後にその日の出席者の一人が筆者にこっそり耳打ちしてくださった内容からである。発言者の名を伏せて、会員から指摘があった旨を下村会長に伝えたことで、上記の回答を得た。この会員の訴えを皮切りにして積極的な研修場探しは進められている。

このことはさらに、研修場所をめぐる問題のみならず、会員の発言の場を整える必要性について気付かされた。積極的に竹箆研究会の問題点を挙げて改善を呼びかけることに竹箆研究会会員は抵抗感を抱いていることが予測される。半年に一度の総会の場でしか、全体に意見が求められる場はない。普段の研修の際も、一刻も早く作業に取りかかろうと、業務連絡以外の時間は設けられていない。気軽に問題点や提案を指摘できる雰囲気や機会を設ける必要がある。

さらには、広報をめぐる問題もある。竹箆研究会の存在を知らしめる方法として、『月刊染織 a』偶数月のインフォメーション欄、ワークショップでの紹介、ウェブサイト、口伝え、という方法がとられている。箆の存在自体が一般には知られにくいことは、織りという専門分野の道具の一部分である性質から、半ば仕方がないと筆者は思っている。しかし、竹箆を説明するに当たって付随する、伝統産業における道具の置かれている状況(5.1にて詳述する)を世の中に知らしめるためには、やはり積極的な広報活動が必要不可欠であるのだ。しかし何を行うに

しても、資金の問題から積極的な活動は行えないでいる。

4.4 小括

以上の様に、やや冗長の感は否めないものの筆者が体験してきた竹箆研究会での関わりを見て来た。ここから、竹箆研究会の主たる目的である技術修得者となるために必要な条件を挙げてみたい。

1. 時間に自由がきく人
2. 収入を他から得ることが出来る人
3. 岐阜県近郊に居住する人

上記の3点は、筆者の体験以上に現在の竹箆研究会研修参加者の常連組の傾向を見ることで導き出すことができる。以上の様な条件に適う人は、中部・近畿圏に居住する退職者や子離れた主婦が主な対象となる。

したがって先ほども少し触れたが、竹箆研究会へ通う人は60、70代が中心である。立場や趣味が似通った人が集まるので、手作業やおしゃべりを楽しむ一種の社交の場となっていることも事実である。この点は本旨から逸れるので割愛する。60、70代が中心と言えど、日本人全体の寿命の延長や、竹箆作りという手仕事に「定年(退職)」の時期は無いことから、極論を言えば「100歳現役」もあり得ないことではない、とは下村会長の口から度々聞かれる談である。

生活の糧を得なければいけない若者は確かに技術修得者としては関わりにくいと言えるであろう。それでも若者であることを生かした視点で竹箆研究会へ関わり、一躍を担えるという自信を持つことが出来る手がかりを、筆者は自身の体験から得られたつもりである。

そして、ウェブサイトが与える効果について見てみたい。4.3で竹箆研究会のウェブサイトを作る目的として、竹箆の作り手と使い手の相互の情報交換の場となることと述べた。そもそも情報交換が成立するためには、竹箆研究会の側でも多くの情報を発信していくことが求められる。その状態は、多くの情報をウェブサイト上に蓄積していく作業にも繋がる。竹箆の他にも、2.1で一例を紹介した様に、求められているにもかかわらずその存在の存続が危うい道具は、この社会には多数存在しているであろうことが予

想される。それらの道具作りを復興あるいは復活させる活動をされている方々へ、道具作りの一つの事例として紹介し、さらには何らかの参考になれることを筆者は期待する。ここで情報のやり取りを通じて道具を越えた繋がりが生まれ、減びていくことを強いられている道具作りが再生されることにより先人たちの素晴らしい知識と技術を次世代にも遺すことが出来ることが期待される。

5. 考察

5.1 産業全体の問題と捉える意義

竹箴研究会は、当初の目的である竹箴製作技術を復興させる段階には到達することができたと言えるであろう。しかし、まだ市場に竹箴を出すことは叶っていないため、そもそも竹箴研究会の設立の切掛けを与えた織り手へ、竹箴を届ける段階には到達していない。そこで、これまでの竹箴研究会の活動からその意義を考察してみる。

この研究会の特性として注目したい点は、受け継がれてきたものの一度は途絶えた技術を現代の人々の手によって再び蘇らすという作業を行うことにより、技術を保存する現場を考える機会と場をもたらしただということだ。それは、4.3で見て来たように、技術習得のためにはより適切な研修場所の確保、竹箴研究会が円滑に進展していくための諸制度の整備、積極的な広報活動、またそれらを支えるための運営資金の確保が必要であるという要素の重要性が実際の現場でもって判明したのであった。

これらの動きはさらに、製品や作品を支える中間工程や道具の特性や属性も変化させざるを得ないということを主張している。これまで完成品を作り上げるための道具や材料はその品よりも下位にとらわれがちであった。しかし今後は、そのような道具や材料の大切さを認識し、業界全体で守っていく動きが必要とされるのではないか。そのため、それらの道具や材料を作ることに携わる人々の意識もより積極的なものへと変えていくことが求められる。文化庁によると、「文化財を支えその存続を左右する重要な技術」と既に中間行程の大切さが位置づけら

れている。また、経済産業省でも、「伝統的工芸品の指定は、当該伝統的工芸品の製造に係る伝統的な技術又は技法及び伝統的に使用されてきた原材料並びに当該伝統的工芸品の製造される地域を定めて、行うものとする。」と、産業全体で守る旨が示されている。

以上の点から、職人を支えていくことを目的とした織物業界全体のコミュニティの整備が必要とされることは明白である。そして支援者が増えるような活動を、竹箴研究会はより積極性を持って取り組むべきである。

5.2 政策面からの検討

もう一点、そもそも実際は求められていないものであるのに、竹箴研究会では無理矢理竹箴を復興させているだけなのでは？という疑問が抱かれることが予想される。このことは、日本竹箴工業が解散した際には、最盛期の40分の1の生産であった点から推測されるのであろう。需要のないものの復興を、ここ数年聞く機会が増えた「スローライフ」や「ロハス」という言葉に便乗して行っているだけではないのか、という疑問である。

この回答として、竹箴研究会での竹箴の復興には周囲からの要望があった上でなされた点を述べたい。竹箴を使用する意義は環境への配慮やノスタルジー感が先立って行われたものではない。これらは後から着いた付加価値に過ぎないのだ。また2.2で述べた通り、文化庁では文化財の保存技術の保護を「文化財保護法」で定めている。したがって、政策の主体は文化庁であると想定する。

5.1で述べた通り、竹箴研究会の試みの意義は中間工程・道具・材料の持つ重要性について、その実践を持って社会に対して気付かせた点から、大きいと言える。であるからこそ、竹箴の民族学的な魅力や竹箴の技術保存に取り組んだ人々の個人的な情熱のみならず、歴史や文化に支えられた道具の価値に対する、多方面に渡る理解と共感の輪が会の活動を進展させ、竹箴の生産者をも生み出し、織物業のための消費材、すなわち道具としての竹箴を現代に復興させたのである。

6. 今後の展望

1.2でも触れたように、筆者は2008年4月から織りの技術を習っている。奄美大島に移住し、大島紬の織り方を習うことを通して、竹箴の使い手としての立場を得るためである。大島紬を選んだ理由は、独特の色に強く惹かれたからである。2008年5月5日現在の約一ヶ月の間において、現役の織り手からは「竹箴の方が使い易いけど手に入らないから」といった嘆きの声が聞かれた。筆者は竹箴がまだまだ需要があることを確信した。山口（2007）が「よい社会を創造する実践に臨む人々は、研究者であるか実践者であるかと問われる必要はなく、双方がともに不可分の実践者（アクター）として捉えてよいのだ。」と指摘することを受けて、筆者自身が竹箴を必要とする人々と毎日接することができる環境に身を置いていることを活かして、竹箴を普及させるにあたってのより適切な方法を

現場から模索していきたいと考えている。

参考文献

- ・ 室瀬和美『漆の文化—受け継がれる日本の美』角川書店, 2002
- ・ 道具学叢書委員会『道具学叢書001 道具学への招待』ラトルズ, 2007
- ・ P.F.ドラッカー『イノベーションと企業家精神』上田惇生訳, ダイアモンド社, 1985
- ・ 田口理恵「最後の竹箴産地 岐阜・祖父江の竹箴」『月刊染織 a』染織と生活社, 第273号, 2003, 39ページ。
- ・ 『穂積町市 通史編 下巻 (近・現代)』太洋社, 1979
- ・ 豊田正保『竹箴』(記録冊子), 2001
- ・ 下村輝「つむぎ#207」『月刊染織 a』染織と生活社, 第256号, 2002, 12ページ
- ・ 山口洋典「ソーシャル・イノベーション研究におけるフィールドワークの視座—グループ・ダイナミックスの観点から—」『同志社政策科学研究』(同志社大学大学院総合政策科学会) 第9巻・第1号, 2007年, 1-21ページ